
真・恋姫?無双 ~天下争乱、久遠胡蝶の章~

茶々

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真・恋姫？無双 → 天下争乱、久遠胡蝶の章

【Zコード】

Z2144BA

【作者名】

茶々

【あらすじ】

時は後漢王朝末期、世には『乱世』と呼んだ時代 王朝に帝の威光は既になく、天下は麻の如く乱れた。長く続く混迷を予期させるかの様に、民は明日をも知れぬ困窮に喘ぎ続ける。嘗て、天下に反旗を翻した少年がいた。少年は終端へと至り、外史は幕を閉じた だが、外史は再び幕を開ける。求める声に、応える為に。

これは、一人の少年の始まりと終わりの物語。

* この作品は『TINA MI』様に投稿している作品と同一の内容

です。よつまくの方に読んで貰いたく、こちらでも投稿を開始致しました。

序章・地（前書き）

本作品は『TINA MI』様に投稿している作品『真・恋姫無双
～天下争乱、久遠胡蝶の章～』と同じ内容です。
より多くの方に読んで頂く為にこちらのサイトでも投稿を開始致しました。

ではでは、宜しくお願い致します。

温い。

初めから期待などしていなかつた事がやはりその通りであつたとでも言いたげな程に希望の欠片も感じさせない眼差しを濃紺の双眸に浮かべながら、青年は街頭のＴＶに映る民主主義の名の元に選出された筈の人気取りの能力ばかりに長けた無能な連中が外面ばかり着飾つた様を淡々と見つめていた。

眩いばかりのまつそらなポリエスチル製の服に学校指定の鞄。近隣ではそれなりに名の知れた私立校・フランチエスカ学園の生徒である事など一目瞭然の姿でありながら、しかしその歐州系に見えなくもない白い肌や深い蒼と紫の織り交ざつた様な複雑な色合いの髪が一般的な街角の中に異国調を奏で、ややあつて歩み出した足元から響く硬質な皮靴の音が更に深みのある音色を醸した。

襟元正しく、折り目正しく。

四角四面という言葉が服を着た様な印象を受ける青年の足はそのまま郊外の最寄り駅から徒步五分、築三年余りの世間一般的には『高級』と分類されるであろう自室のある分譲マンションへと向かつた。

向かつた、筈だつた。

「…………」

つと、青年の足は帰宅路の一角に最近新設されたゲームセンターの前で止まっていた。もっと正確に言うのであれば、ゲームセンターの前の通りに半分その巨体をはみ出しているクレーンゲームのガラスにピッタリとくつついて地蔵か石像の様に動かない少女の背を見る格好で止まっていた。

波打つ様なブロンドの髪は腰どころか、ともすれば足元にすら届きそうな程にとにかく長い。背格好は推察するに青年の腰より少し高いくらいの所に頭が来るだろうか。クレーンゲームの中身を覗きこむ様にしてやや背伸びしている様子だからハツキリとは判別し辛い。

何でこんなありふれた街角のゲームセンター前に美少女が?と、行き交う通行人の多くは少女に怪訝そうな眼差しを、或いは見惚れた様な視線を向けている。この時間帯ならナンパ目的で誰か声の一つでもかけそうなものだが、覗きこんでいる代物が代物なのかそいつた類の所謂『チャラい』輩が寄り付く事はない。

遠目にその中身を見た青年ですら、その代物の余りのイロモノ加減に辟易とした表情を隠そうともしなかった。現世のピカソを気取った頭の沸いた小僧が落書きしたとしか思えない様な落書きをリストラ寸前の万年窓際族な係長補佐が縫い上げた様なデザインのぬいぐるみ……? どうか。兎も角そんな感じの代物が十、二十……数え

るのも面倒というか数えたいとは欠片も思わない、前衛的と聞こえるいい廃棄物もどきが乱雑にその中にあった。

それらに食い入る様に視線を向け、微動だにせず、それでいてゲームをする訳でもないという店側からしたら果たして密着きのメリットと営業妨害のデメリットとさてどちらの方が大きいのだろうか。そんな事を考えている内、不意に少女の元へと駆け寄る影があった。

「風！貴方また学校を抜けだしてこんな所で……！」

見るからに委員長気質な保護者役と思しき女性があれやこれやと説教しながら少女を引きずつて店先を後にするという中々に珍妙な一幕は、ややあつて響いた豆腐屋のラッパ音によつて普段の日常へと回帰する。

そんな凡庸で、平凡な日常生活が周囲をただ淡々と流れる中で、青年の足は再び動き出す。

青年の名は司馬 達也。

聖フランチエスカ学園の2年生であり、帰宅部に所属していた。

郊外の分譲マンションはその新築具合、内装設備の充実などからそれなりの値が張る優良物件であり、住むのもそれなりに中産階級の上級に位置する人間が多い。その為かセキュリティも安全性や信頼性は元より快適性や利便性等の各方面に万全を期しており、指紋認証と6ケタの暗証番号によつて開かれる自動ドアを抜けて、最新鋭の高速エレベーターが地上13階の最上階へと辿りつくまでには五分と時間を要しない。

その最上階にある自室の扉を開け、後ろ手に鍵を掛けた達也は気だるげな足取りで真っ暗な部屋へと踏み入り灯りを燈す。

生活臭の乏しいリビングはフローリングが晒されたままで、机や椅子の足に申し訳程度に絨毯が敷かれている。外界と室内を遮る窓には日除け用のカーテンすら存在せず、ガラスの向こうにはイルミネーションの様に彩られた夜の街並みが一望できた。

だが、家具の一切から戸棚に揃えられた必要最低限の食器に至る諸々、その全てからは欠片も『生活』という様相を垣間見る事は叶わない。買い揃えられたばかりの精巧な人形遊戯の玩具の如く、それらはただ『有る』だけだった。

そんな中を達也は進み、やがてリビングの一 角にひっそりと鎮座する様に置かれたソファにその体躯を投げ出した。

ボーフン、と新品特有の弾力性に富んだ音が木霊する様に室内に反響し、ややあつてスプリングの跳ねる音が一、三回響いたかと思うと、それっきり。壁に掛けられた時計が秒針の進む音だけを響かせて、部屋の中に酷く冷めた沈黙が降りる。

達也の親は片親であつた。

幼い頃に父を失い、実業家でもあつた母は女手一つで達也を育ててきた。しかし月に數度も海外に自ら赴かなければならぬ程に多忙を極める母の愛情に触れる事の少なかつた達也は、その多忙を理解していながらも温もりを求めて止まなかつた幼心を抑えきる事が出来なかつた。

結果として半ば家出する様に実家を飛び出しておきながら、結局は母の会社の系列が管理するこのマンションへと転がり込んで既に幾ばくかの月日が流れていった。

「…………」

何時からだつただろうか。

母の元を飛び出してからだらうか。

母が嘗て在学していた聖フランチエスカに編入してからだらうか。

時折、達也は妙な夢を見る事があつた。

眼を開けると……暗い。真つ暗な世界が淡々と広がつていて。星さえも瞬かず、凡そ人の温もりは浮かばぬであろう黒一色に塗り潰された世界がそこには広がつている。空と地の境目すら分からず、そもそもそこが広大な大地なのか遙かな空なのか奈落の底なのか、それすらも判別が出来ないでいる自分がいる。

「…………」

そうしてふと、田の前に『何か』が現れるのだ。

先程までの『無』しか存在しなかつた世界に唐突に現れた異物は、
しかしその形さえも知りえる事は出来ない。

『それ』はつう、と達也の田の前の空間を撫でる様にして腕と思わ
れる個所を動かし、ややあって再びその存在は無動へと戻る。

一瞬なのか永遠なのか、理解の及ばない無言が幾ばくか続いた気が
して。

『其処』が世界の果てなのかこの世の果てなのか、或いは小学校に
入る頃には伝え聞いただけ嘲笑を浮かべていた『地獄』なる地の
『閻魔』の膝元なのか。

そして、幾らかの時を置いて、

「あら~ん、随分と浮かない顔をしてるじゃない」

『声』が増える。

「……ああ、貴方でしたか」

応える様に、田の前の『者』が女と思しき聲音で口を開く。

「どうかしたの？ひょっとして漸く『ご主人様』の魅力がアナタにも分かつてきたのかしら～ん？」

『ご主人様』というのが誰を指す言葉なのかはよく分からない。だが少なくとも、その妙になよなよしい口調で紡がれる矛先が自分ではないだらうと思う事に精一杯で、そうであつて欲しくないと希求するのが大多数だつたりする。

……いや、その辺りはどうでもいいか。

自嘲の意味合にも含めて口元を吊り上げる　　吊り上げようとして、そこに至つて漸く『僕』は自身の身体が何の反応も起こしていないという事実を知る。

脳髄が幾ら指令を送りうとも、身体はそれに全く応えない。それどころか瞼すら上がりあらず、だというのに脳は『見ている』と認識した様に目の前に広がっているのであるうつ光景をまざまざと『僕』という存在に見せる。

『僕』が当惑の念に混乱している頭を必死に落ち着かせている間、『それら』は何故か無言の中にあるのだ。語ろうとしない、語る口をもたない、語る事柄がない……どれでもいい、兎に角無言だ。動作の一切が停止され、遮断され、拒否されているかの様に『それら』は筋一本動かす事すらせずにそこにいた。そう認識した光景が脳を介して達也に知らせる。

「…………『彼』は」

静寂を破るのは、何時でも決まって最初に認識した『者』の方の声
音。

澄んだ音色は楽器の様でありながら、何処か沈鬱とした雰囲気が感じ取れる、悲しみを押し殺した様な聲音。

「『彼』は、もう覚めないかもしません」

この場合、『彼』とは即ち『僕』なのだろう。
それくらいは察しがつく。といつより初見の時ならまだしも、既に
幾度も幾度も同じ夢を繰り返しているのだから分からぬ訳がない。

「今回の旅路は、これまでとは違った結末でした」

「彼の願いは、祈りは『あの子』を通して『彼』に伝わり、そうして、この外史は……」

「それを肌身で感じたからこそ、彼はああも幸せそうに……安らかに眠っています」

声音は慈愛と、切望と、悲哀に満ちている。

『女』の声はただ虚しく響き、そうしてやがて意識は遠ざかり再び現実へと戻る。

それがいつもの夢だった。

それはここ最近においては同馬達也の一日の終わりを知らせるものであり、同時に一日の始まりを告げるものでもあった。

「それが……」

「口惜しい……と？」

鼓膜が、震えた。

「卑弥呼……」

脳髄の奥底がズキリと音を立てて軋んだ気がした。
瞼の奥が焼け付く様に熱く、膨大な量の映像が脳の処理能力の限界を超えて押し寄せてくる。

「時折思うのです。ひょっとしたら『彼』は、生きていても良かつたのではないかと……死なずとも『彼』の願いが届き、皆の想いと成りえたのではないかと」

血の海に沈む氣高き霸王

唯一無二の主であり、『私』と最もかけ離れた少女

『女』は語る。

鏡に映した『私』であるかのように、その心の奥底を見透かした様に静かな声音で。

「それもまた、外史の筋書きの一つ。されどあのぼーいには、その外史の先を『彼』と共に歩む事は出来ない」

紅の都に散る信義の大徳

私の得られなかつた全てを得た、『私』が最も忌み嫌う少女

『卑弥呼』は語る。

幾度も繰り返されてきた輪廻の果て、『僕』が辿りついた残酷な真実を。

「『主人様と　くんは似て非なる存在。相反し、その両極はただ平行線を辿るだけ。だからこそ、彼は受け入れたのでしょうか?己の結末を。外史における『死』という顛末を」

満月の下に崩れ落ちる臥竜

『私』が、『僕』が、『　』が、何もかもが求め続けた

少女

『者』は語る。

『あの『外史』において、漸く受け入れる事が出来た』の、
完全な敗北の筋書きを。

「…………」

知らない筈の光景が、映像が荒波の様に押し寄せる。
幾つも。幾つも幾つも幾つもいくつもイクツモイクツモ

黙したのは『女』か、『卑弥呼』か、『者』か。

！――！

沈黙を終ぞ破つたのは、『卑弥呼』だった。

「…………しかし、それでも叶えたいか」

問い合わせるその声音は、厳格にして莊厳。いつそ神格めいてさえ感じられる程に気迫に充ち溢れた、強者の問い。

「あの子に、真の幸福を味わわせてやりたいか」

『女』は答えない。

『者』は応えない。

ただ朗々と『卑弥呼』の声が響く。

「ならば築けば良い。うぬの望んだ理想を、新たなる歴史を刻めば良い」

だからだろうか。

その声に僅か、慈愛にも似た温かさを覚えたのは。

身体が揺らめく。

暗く深き水底にいたのか、周囲を水泡が揺らめき、身体にあたつて弾ける『感覺』が蘇る。

「『彼』が望み、願えば、叶わぬ事など何一つない」

望み?
願い?

身体が淡い光に包まれていくのを感じる。
意識が薄れ、しかし全身に血が通うのが分かる。五感が戻るのが分かる。

嗚呼、何だ。

深い眠りから目覚める様に、存在の全てが蘇る様に、雁字搦めに
を縛りつけていた紐が解かれていく。

僕は、望む。
私は、願う。

来たれ。来たれ。来たれ。

僕自身よ。
私自身よ。

僕に付隨する全てのモノに告げる。
私に付隨する全てのモノに告げる。

選び取る名は只一つ。
「えられし名は只一つ。

我は此処に告げる。

我の全てを以て、此処に告げる。

蘇れ。

司馬懿、仲達

それは、遙かなる夢の中に紡がれた物語。

戦いの中に、争いの中に、諍いの中に繕られ、紡がれ、繋がれた物語。

憎しみを、悲しみを、怒りを、嘆きを。

全てが糧となり、血肉となつた少年は、世界へと反逆の狼煙を上げた。

永く、遠い道のつの果てに。

暗く、冷たい夜の向こうに。

その最果てに光を見出し、そして再び、今度こそ明ける事無き終端へと導かれた、一つの魂へと贈られた鎮魂歌。

夢さえも、現さえも、何一つ彼を救う事はなかつた。
多くが願えど、少年はそれを拒んだ。

自らが望んだ終端。
自らが望んだ終焉。
自らが望んだ終末。

その願いは、祈りは僅かばかりとはいえ彼の友へと、仲間へと、敵であつた者達へと届き、通じて いつか、その想いだけが無形のまま残り、『彼』の存在はやがて消えていく。

それは少年が望んだ事。

それは少年が願つた事。

幾つもの世界で、幾つもの時空で、終ぞ届く事のなかつた想いが、祈りが、願いが届いた場所。届いた世界。

そこに自分がいなくとも、そこに広がる世界は、光景は、少年がただ只管に願つた平穏なる姿として続いていた。

徐々に視界が霞んでいく。
意識が希薄なものとなつて、霞の中に霧散する様に消え往くのを感じる。

遂に訪れた、待ち望んだ真の終端。

魂の終着点は白く、淡く、そこに溢れる光は強く輝いて世界を照らしていた。

『…………ん、う…………？』

声が、聞こえた。

白く霞む世界の何処かで、酷く聞き慣れた声音が響いた。

『…………おやおや～？』

だけど、その姿は何処にも見えない。

手探る様に身体を動かそうとして、手のみならず腕も　　体中、
自分を構成する全てが水泡の様に脆い姿をしている事に漸く意識が
行きわたつた。

動けば、脆く崩れ去るより他ない運命の肉体は、けれど迷ひ事なく
その手を伸ばした。

粒子の様に小さな光の粒が一つ、一つと零れていく。

『……………』
『……………』

『……………』
『……………』

声のする方へ。

温もりを感じる方へ。

何処にあるのか、そんな明確な判断は欠片もないまま、ただ心がざわめく方へ、意識が赴く方へと手を伸ばす。
どれだけ身体が崩れ去っているかなど、最早判別もつかないくらいにボロボロと砂の様に散りゆく事に割ける意識などある筈もなく。

終わりを求めていながら、どうしてこんな真似をしてしまつのか。

そんな問いは愚問であると、自分自身を嘲笑う様に切り捨てて進む。

『……………』
『……………』

心が渴望する様に叫びを上げた。

魂の奥底からその存在を求める様に声を張り上げた。

もう粒子は止めどなく崩れ落ち、伸ばした腕と、申し訳程度の顔の部位以外はその殆どが水泡と化した様に散っている。

このまま届かず、永遠の終わりを望む自分。

今更になつて存在を惜しみ、届いて欲しいと願う自分。

いずれもが自身の意識であり自分自身である事を理解し、相反する想いが闘き合いつ様に崩壊と到達は並行して進む。

『フフ……』の際、どちらでもいいのですよ~

何かが此方へと伸びてくるのを感じた。
その存在を求める様に、加速する崩落の中で身体は進み、腕を懸命に伸ばす。

そして、すれ違う様にして互いの掌がお互いの顔へと辿りついた。

『会いたかった、です……』

懐かしい温もりが、求めた温かさが、そこにあった。

そして仲達は、自分が光に包まれていく感覚に身を委ねた。

やつとい、捕まえた。
よつやべ、見つけた。

これは、遙かなる夢の果てに紡がれる物語。

戦いの中に、争いの中に、静いの中に綴られ、紡がれ、繋がれた、
その先の物語。

久遠の彼方、胡蝶が魅せる最期の奇跡。

ただ一度だけの、たつた一つの祈りを聞き届ける為の物語。

何かおかしい。

聖フランチエス力学園に附設されている博物館で今朝方担任より与えられた有難くもない課題という面倒な物を片付ける為、親友兼悪友の及川と共に館内を巡っていた一刀は、足を運ぶ事自体稀な筈のこの空間に妙な既視感を感じていた。

「ん？ どないしたんや、かずピー」

「……いや、何か前にも来た気がするなあつて……

「……は？」

及川は一瞬呆けたかと思うと、次の瞬間にはまるで掘り返した土の中から徳川埋蔵金の在り処を示す古文書を発見した土木業者の様な奇異な視線を一刀に向かた。

「……そつかそつか。かずピー、気持ちはよーっく分かる。うん」

- 1 -

「いやーーー」の間はホンマすまんかつたつて!なんせ、折角の『で
えと』やつたからついつこ張り切つてしまつて!…なつせせせせ!

二

「そつかそつか！思わず現実逃避しどうなるくらいショックやつた
つちゅう事か！ま、かずピーかて顔はそこそこイケてるんやし？
頑張ればワイみたいに休日に女の子とキヤツキヤウフフでハッピー
なサンデーも送れるんやないか？ん？」

敷蛇だつたか。

隣で喧しく口を開き続ける似非関西人をリアル拳で黙らせてやろうか、と思った矢先、

「」

明らかに故意的な野太い咳払いが鼓膜を揺らす。

見れば身長は2mはあるかという大男が、制服をパツンパツンになるくらいに内側から押し上げる筋肉をピクつかせながらギヨロリと剣呑な瞳を此方に向け、それだけならまだ頑強な警備員という事で通りそうなのに……何故か制服は上しか着てないしネクタイを首に直接巻いているしスキンヘッドだし揉み上げが三つ編だしリボンだし髪だし。

ツツコミ所満載というより最早ツツコミを入れない個所が存在しないのではないかと思えるくらいに珍妙な存在がそこにいた。

とこりか、警備員（？）だった。

「ひお……おつかないわあ……」

「黙つて見学しろ、って事だろ？大人しくしていいぜ」

「せやな…………しつかし、あれが一番の不審者と違つんか？」

思わず心中で同意しつつ、歩を進める。

館内の展示物は、今朝の朝礼における学園長曰く「鑑定書付きの由緒正しい代物」らしく、言われてみればあらゆる展示物の脇にそれと思しき紙がこれ見よがしに張り付けられている。

曰く、関羽の武器。

曰く、南蛮王の独鈷杵。

曰く、袁家の宝刀。

曰く、五斗米道（いじうじゅ、えいじー）の医術書。

……えとせとび、HTセトウ、etc.

「…………なあ、かずピー？」

「…………な及川、何も言つんじゃなー」

学園長はまたしょうもないものをつかまされてきたよつだ。

この間は何だつけ？織田信長の刀剣とか秀吉の黄金の茶碗とかそんなんを展示していた記憶があるが、あれもやはりというか何と言うか……まあ『展示品』としてはそれなりに良く出来た品だった、とだけ言つておひつ。主に学園長の名誉の為に。

そもそも、千八百年も前の品物がこんなに上等な品質のまま残つている訳が

……………と

「……ん？呼んだか及川」

「んあ？何の話や？」

「……いや、何でもない」

まだだ。

さつきから妙な既視感というか、変な感覚が喉の奥に引っ掛けた小骨の様に気になつて仕方がない。

それは歩を進める内にどんどん強くなつて、やがて脳にズキリと一條の激痛を奔らせる。

「ツー？」

思わず顔を顰めて抑えると、前を歩いていた及川が「どうした？」
とでも言いたげな視線を向けてくる。

気にするな、とだけ答えて、一、二度深呼吸を繰り返して落ちつかせた。

きつとさつきから妙に強く感じる冷房の所為だらう。早く外に出て
あつたかいお茶でも飲みたい。

そう思つてやや早足に館内を進んでいくと

「……お？」
「……ん？」

及川の声に惹かれる様に視線を向け、その先に一人の男を見つけた。
凡そ日本人とはかけ離れた真っ白な肌、モデルと見紛う程にスラリ
と伸びた手足の隅々に至るまで丁寧な手入れが成されているのか、
やや病的とも思えるくらいに綿雪の様に白い肌にはシミ一つ見当た
らない。深い蒼と紫が織りなすコントラストがやたら格調高く感じ
られる髪と濃紺の双眸と云えば、如何に金髪銀髪碧眼紅眼が入り乱
れる人種魔境的なこの聖フランチエスカにおいても一人しか該当者
は存在しない。

司馬 達也。

純正の日本人とか嘘だろ、と思わずにはいられないそいつを視界に収めた瞬間、穿つ様に鋭い痛みが目の奥を抉る様に響いた。

「ツ！」

及川は何事かを呟いていて気づいた様子はない。

余計な心配はかけまい、と今の内に速やかに痛みを抑えつけて落ちつかせる。

やや荒くなつた吐息を整えながら、視線は達也の先へと移つた。

彼が見ているのは、一枚の紙だった。

千八百年前と云えば、紙はまだ高級品の部類を出ていなかつた。となれば、それを書いた人間は自然と上層階級に絞られてくるのだが

……

「諸葛亮、直筆……？」

「なんや、たつやん孔明に興味あるんか？」

斜め後ろから突然投げかけられた筈の言葉に、しかし達也は取り立てて驚いた様子も見せず、此方を振り向いた。と、深い濃紺の双眸

が俺達 恐らく、正確には俺 を捉えた瞬間、僅かにその目が見開かれる。

「かず……ツ！ほ、北郷か…………それに、江川、だつたか？」
「うおいつ！？ええ加減名前くらい憶えてえな！及川や！お・い・
か・わ！」

音量こそ押し下げたが、やはり似非とは云え関西人の氣質が裏平手を見舞う。

と、不意に達也の腕が俺を捉えた。

「すまない。では及川、暫しの間北郷を借りるぞ」
「は？」
「え？」
「理由に関しては今は何も言えん。『帰つて』これたならその時に全てを話すと俺の名に懸けて約束する。だから今は何も問うな……
……行くぞ、北郷」

何が「では」で何が「行くぞ」なのか。

当事者の筈なのに何も聞かされていない俺を引き連れて、呆気に取られる及川を尻目に細腕のくせにどこにそんな力があるのかと問いたくなるくらいに力強く握られた俺の腕を引っ張つて達也はぐいぐいと館内を進んでいった。

か
.....
とー

曲がって、昇つて、進んで、降つて、曲がって、曲がつて。
どれくらい進んだのか、今いるエリアがどの辺りなのか、そもそも
附設のくせになんでこんなにこの博物館は広いんだとあれこれ問い合わせ
たりながらも、結構な速度で進んでいく達也に引きずられる様
にたたらを踏みながらその後を追いかける。

と、不意に随分と開けた展示室でその足取りが止まった。

何時の間にか解放されていた腕にはうっすらと指痕が残り、気がつけば随分と痛みを増していた頭痛に顔を顰めながらも上げて、達也の背を見やつた。

瞬間、また激痛が奔る。

頭の奥底を揺らす様な誰かの声と共に、ズキリズキリと痛みが脳内を抉る様に響く。

「……嘗て」

独白の様に、達也の声が鼓膜を揺らした。

「千八百年も昔、今の中国と呼ばれる大陸に三つの国家が生まれた。三人の王が生まれた。数多の英傑が、幾多の死闘が、そこに生まれた」

朗々と、澄み渡った小川の様に清らかな声が響く度、『知らない』光景が瞼の裏に映る。

桃の花咲き誇る中、杯を交わす四人　　己が霸道を
貫く気高き王　　血の海に沈む女傑　　余りにも遠大な
理想に潰されそうになる　　死地において尚その志を
曲げない　　母の、そして姉の背を追う様にひた走る

幾つもの光景が、映像が、音声が、まざまざと蘇る。

記憶の奔流にのまれそうになつて、酩酊する視界が虚ろになりかけ
て、

「…………そして、天下は『晋』なる四つの國家の元で『一つ』に
なつた」

違う。

思つて、口に出して、途端に俺はそれが俺の意志から出た言葉な
かと自分自身を疑つた。

「…………北郷、一刀」

ゆづくりと、噛み締める様に俺の名前を紡ぐ。

涼やかな声音が、唐突に脳裏を過つた『青年』の影と重なる。

一刀

「ちゅ、う……達？」

カチリ、とぱらぱらだつたパズルが一枚の画になる音が頭を打つた。眼前で達也は　仲達は、ただ笑っている。ほんの少し嬉しそうに。ほんの少し寂しそうに。

「あの時、あの『外史』で僕の物語は完結した……その筈だつた。それがどうだ？氣づけば千八百年もの時を超えて君のいた時代に蘇り、氣づけば『司馬 達也』などといつ名を『えられて 気づけば、僕は僕が『私』であつた事すら、忘れていた」

「…………」

「誰がこんな事を望んだ？誰がこんな事を願つた？華琳様が、劉備が、孫權が　朱里が、風が、そして何よりも、君が。君達が成した筈の全てが『無かつた』事にされる等、どうして許容出来る？」

「…………仲達」

「嗚呼、分かつていてる。これが本来あるべき正しい『世界』だとう事くらい、僕にはとっくに理解出来ているよ。だけど、ならば何故僕は此処にいる？何故『私』は目覚めた？」

何故、何故。

答えを求める無い問いかけを繰り返して、仲達の独白は尚も続いた。

「全では終わった事、過去の事実　　そう受け止めようと、
そう思つていた。…………だが、見つてしまつたのだよ。巡り
合つてしまつたのだ、僕は」

その瞳に蘇るのは、恐らくはあの手紙。

諸葛亮　否、『朱里』が残した、『仲達』に向けた手紙。

「朱里は生きていたんだ……千八百年も昔、この世界に。そしてそれは誰だって同じ筈だ。風も、？瑞も、月も……なのに、なのに…。どうして皆が忘れ去られなければならない！？どうして皆が消え去らなくてはならない！？誰が望んだ！誰が願った！！こんな結末を、こんな顛末を！こんな　こんな終わり方を！…！」

震える声音を絞りあげる様にして、仲達は叫んだ。

「何だつたんだ！？あの乱世は、一体何の為に存在したと……ッ！」

遺る瀬無い思いのだけをぶちまける様な声が、俺と仲達しか存在しない空間に反響する。

その時。

「ツー？」

突如として凄まじい地響きが襲ってきた。建物が激しく揺れて、大地がひっくり返るのではないかと錯覚するくらいに凄まじいそれに呼応する様にまるで意志を持ったかの様に、そこに飾られたいた剣が、置物が、そして鏡が震えた。

「何だツー？」

「一刀！！」

仲達の声が鼓膜を打つ。

見やれば、ただの展示物でしかない筈のそれらが眩いばかりの輝きを放つて世界を白く塗り潰していく。

「かず　　ツー！」

刹那、感覚の全てが失われて。
俺は『光』に呑まれた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2144ba/>

真・恋姫?無双 ~天下争乱、久遠胡蝶の章~

2012年1月5日20時52分発行